

## 第38回全日本少年サッカー大会 技術報告書

- 目的：4種全国大会の現状共有
- 観戦日時：平成26年8月4日（月）～8月5日（火）
- 観戦場所：裾野市時之栖 裾野グラウンド
- 報告対象者：静岡県4種年代を中心とした育成年代指導者
- 報告者：ユースダイレクター 石井知幸

### □選手の質とコーディネーション

プレーの質が高い選手は、オンザボールの動作（ボールフィーリング）や守備時の対応の動き（ステップ）がスムーズでコーディネーション能力が高く、特に浮き球を処理（トラップ）してから次のプレーへの移行が正確でスムーズだった。ボールのコースを認識したらボールコースに体を運び体の中心でボールをコントロールし、しなやかな動きで足元にボールを収め次のプレーに移行できていた。プレーの質とコーディネーションの質を切り離して考えることはできないが、以前から議論されている育成年代のコーディネーショントレーニングについて、改めてその重要性を感じた。コーディネーションTRと考えると、ボールを持たないドリル系のTRを思い浮かべるが、「サッカーに必要な動作を習得する」ためには、KIDS年代からドリル系TRとボールTR時のフォーム（腕、膝の使い方）や、相手の動きやボールの質に対するリアクションの動きに対しても、「技術の習得」と同様に働きかける必要があると感じた大会であった。

### □GKからのビルドアップ（攻守の切り替えの早さ）

「攻撃の始まりはGKから」とよく言われるが、今大会ではGKからのビルドアップに関しては課題があったと感じた。今大会では、GKがボールを捕ると両チームの選手ともにプレーがリセットされてしまい、その結果GKから味方へのフィードよりもパントキックが多くなっていた。試合状況により意図的にプレーをリセットするときもあるが、受け手も出し手（GK）も常に攻守の切り替えを早くすることを意識し、相手が次のプレーのポジションを取る前に、攻撃に転じるプレー（ポジション取り）を習慣化することが出来れば、より質の高い試合を行うことができ選手自身も成長していくのではないだろうか。

「攻守の切り替え」の早さや質に関しては、テクニックと同様に「良い選手」の絶対的な条件であり、この年代からより高いレベルを求めて日々意識してもらいたい。